大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

児童養護施設職員にとっての「子どもの声を聴くこと」の現状と課題：児童養護施設職員アンケート調査からの考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): Children's home, self-advocacy, children's right to express their views, children's views 作成者: 伊藤, 嘉余子, 藤井, 健志, 井上, 翔一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017606

【論　　文】

児童養護施設職員にとっての「子どもの声を聴くこと」の現状と課題

―児童養護施設職員アンケート調査からの考察―

伊藤　嘉余子[1)]　藤井　健志[2)]　井上　翔一[3)]

1）大阪府立大学

2）大阪府立藤井寺支援学校

3）京都市立京都奏和高等学校

要　　旨

本研究では、社会的養護の子どもたちの養育者である施設職員たちが「子どもの意見をきくこと」にどのような意識、難しさを感じているのか、今後どのような研修や支援等を必要としているのか等を明らかにすることを目的として施設職員を対象とした調査を実施した。その結果、多くの施設職員が「子どもの意見を聴こうと努力している」「子どもの意見を聴くことは大切だと思う」と回答した一方で「子どもの意見とわがままの区別は難しい」「子どもの意見を聴くことは難しい」と考えていることも明らかになった。また、多くの施設職員が、子どもの意見を聴く機会を増やすための工夫を行っているものの「話を最後まで聴く」「受容・共感の姿勢で聴く」等といった「聴き方の工夫」についてはあまり実践できていないことから、今後の課題として、施設職員を対象とした「話の聞き方」に関する研修の必要性が示された。さらに、子どもからの意見の多くが、不満や要望であることから、おとなと子どもが一緒に施設生活のあり方について再考していく必要性も調査結果から示唆された。

キーワード：児童養護施設、セルフアドボカシー、子どもの意見表明権、子どもの声

1．研究の背景

1）子ども家庭福祉における「子どもアドボケイト」に関する議論の活発化

近年、社会的養護を含む子ども家庭福祉の分野において、当事者である子どもの声・意見を適切に聴取し、その声を法律や制度政策、施設運営、施設生活内容などに具体的に反映させることの重要性と必要性に関する議論が活発化している。

2016（平成28）年３月10日社会保障審議会児童部会「新たな子ども家庭福祉のあり方に関する専門委員会報告（提言）」において、「自分から声をあげられない子どもの権利が確かに保障されているかを監視するため、第三者性を有する機関の設置が求められ」ていることが強調されるとともに、「当座、現存する都道府県児童福祉審議会を活用し、子どもの権利擁護」を図ることとされた。

また、2016（平成28）年６月３日に成立した「児童福祉法等の一部を改正する法律」において、児童福祉審議会は、関係者に対し、必要な報告等を求め、その意見を聴くことができること（児童福祉法８条第６項）とされるとともに、児童福祉審議会の委員の要件に、その権限に属する事項に関し、公平な判断をすることができる者であることが追加された（同法９条）。あわせて、子どもの権利擁護に係る第三者機関の設置を含めた

実効的な方策を検討することも本法改正の附帯決議として盛り込まれた。

当事者である子どもの声をどのようにして聴き、子どもの権利擁護に反映させていくかについて議論が進む中で、近年注目されているのが、「子どもアドボケイト」である。

「アドボケイト（advocate）」とは、「代弁者」や「擁護者」などと訳される英語であり、さまざまな理由で意思表明が難しい高齢者、障害者、子どもらが自身の思いを示せるように支援し、その権利を代わりに主張する立場の支援者を意味する。具体的には、行政機関が法的措置や福祉サービスについて決定しようとする際、当事者の立場に立って意向を示す役割を担ったりする。近年、日本で議論が活発化している「子どもアドボケイト」は、英国やカナダで公的な制度として導入されており、子どもが自分に関する重要な決定にアドボケイトとともに参画する仕組みが整備されている。例えば、親子分離中の実親との交流の頻度やありかた、親子分離の期間などについて自分の意向を述べるプロセスをアドボケイトが後押しするようなかたちでサポートしている。栄留（2015）は、行政の判断によって実親や家族と離れて暮らすことになる社会的養護の子どもたちに、国連子どもの権利条約第12条に規定された「子どもの聴かれる権利」（the right of the child to be heard）を保障するためにも、独立アドボケイトの導入が必要ではないかと提唱している。

２）児童養護施設職員にとって「子どもの声を聴くこと」の意味と葛藤

「子どもの声を聴くべきだ」という主張や議論が活発化する一方で「子どもの意見をきいたら子どもがわがままになるのではないか」「子どもの意見とわがままの違いをどう判断するのか」「子どもの意見をきいてもそれを実現できないときはどうするのか」といった施設現場からの戸惑いの声も少なくない現状である。

日本では2017年から「市民アドボケイト」というモデル事業が始まっている。この事業では、アドボケイトに関する一定の講習を受けた市民が、「市民アドボケイト」として、児童養護施設などを定期的に訪ねて、子どもの声を反映させるように支援するというものである。

2019年３月、このモデル事業の活動報告会が大阪で行われた。その中で、ある施設職員が「職員にとっては、直接日常生活に関わっている職員でない人が入ることによって、利害とかそういったものから離れた人が入ることによって、一生懸命子どものことを考えてやってきた、だけど他者から言われて自分は間違いなのかみたいな感じにとらわれてしまう」と、第三者であるアドボケイトが施設に来て子どもの意見を聴くことによって、施設職員と子どもとの関係が悪化すること等のリスクを危惧する意見を述べた（NHK：2019）。

３）子どものセルフアドボカシーを支援する実践からの気づき

社会的養護のもとで暮らす子どもにとって、現在の養育者である施設職員や里親には言えないことを定期的に聴きにきてくれるアドボケイトの存在は頼もしく心強いものであろうと考えられる。しかし、その一方で、日ごろから一緒に生活している養育者である施設職員や里親に対して、子どもが自分の意向や気持ちを十分かつ適切に伝えることができることも、また同時に大切なのではないかと考える。

こうした問題意識を起点として、筆者らは５年前から、児童養護施設と里親家庭の子どもたちのセルフアドボカシーを支援する取り組みを継続して実施してきた。子どもたちの少ないボキャブラリーをいかに豊かなものにしていけるか、子どもがひとりではなかなか深く見つめられない自分自身の思いを掘り下げていくプロセスにおとなが寄り添いながら、子どもが見つけた「自分の本当の気持ち」をどう言語化していけるかを「デザイン国語」という取り組みの中で模索してきた。その中で、「第三者であるアドボケイトによる意見聴取」や「子どもが自分で自分の意向や声を言語化するセルフアドボカシーの支援」だけでなく、それらに加えて、子どもの声を聴くことのできる「施設職員・里親の養成」も必要なのではないかと考えるに至った。

２．研究の目的

本研究では、上記のような問題意識やこれまでの「デザイン国語」での実践成果を踏まえ、社会的養護の子どもたちの養育者である施設職員たちが「子どもの意見をきくこと」にどのような意識、難しさを感じているのか、今後どのような研修や支援等を必要としているのか等を明らかにすることを目的として施設職員を対象とした調査を実施した。

３．研究の方法

近畿２府４県内にある児童養護施設全100施設に調査票および調査票フォームにアクセスできるQRコードを郵送した。調査への回答者は「直接支援職員」（全体でおよそ2,500人）とした。調査時期は2021年７月～2021年８月である。

調査結果の分析には、SPSS Statistics 24.0を使用した。子どもの声を聴くことへの意識に影響する因子については、サンプル数を勘案し、実践的で幅広い知見を得るためにシンプルな解析方法を採用し、相関分析（スピアマンの順位相関係数）を実施した。

４．倫理的配慮

施設長に対し研究に関する説明を調査依頼文書で行うとともに、調査回答者宛の別の依頼文書も同封し、調査に関する説明を行った。調査・研究への協力はあくまでも自由意思に基づくものであり、途中離脱、研究への協力・質問項目への回答の可否によって不利益が生じることがないことを保障する旨を明記した。また、得られた情報は本研究の目的以外には使用しないこと、研究成果を公表する際には、地域や個人などが特定されないように記述のしかたを工夫するなど、細心の注意を払うことを依頼文書内に明記し誓約するとともに、自由記述欄への回答については、個人情報の守秘に十分な配慮をしたうえで、その一部をそのまま公表することがあることを断り書きした。なお、調査協力への同意については、調査票の返送をもって同意とみなす旨を調査依頼文書に明記した。

なお、本研究は、大阪府立大学人間社会システム科学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：2021(1)-７）。

５．研究の結果

１）回収数と勤務施設の所在地

調査の結果171件の回答があった。

回答者の勤務する施設の所在地は、大阪府62件（36.3%）、京都府35件（20.5%）。兵庫県56件（32.7%）、奈良県４件（2.3%）、和歌山県８件（4.7%）、滋賀県６件（3.5%）であった（図１）。

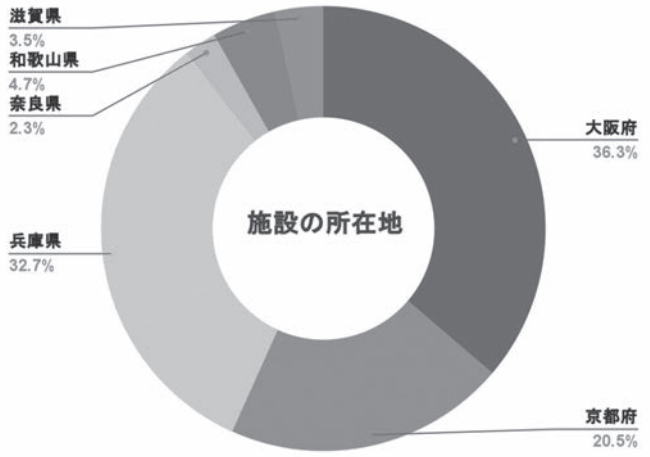

図１　回答者の勤務施設の所在地

２）回答者の勤務施設の養育形態

回答者の勤務施設に存在する養育形態について複数回答で回答を求めたところ、最も多かったのは、小舎制（１ユニット12人以下）で75件（43.9％）であった。そのほかの本体施設については、大舎制（１ユニット子ども20人以上）が47件（27.5％）、中舎制（１ユニット子ども19-13人）が29件（17％）であった。

小規模ケアの実施状況については、「施設敷地内の小規模グループケア」が60件（35.1％）と最も多く、地域小規模児童養護施設は50件（29.2％）であった（図２）。

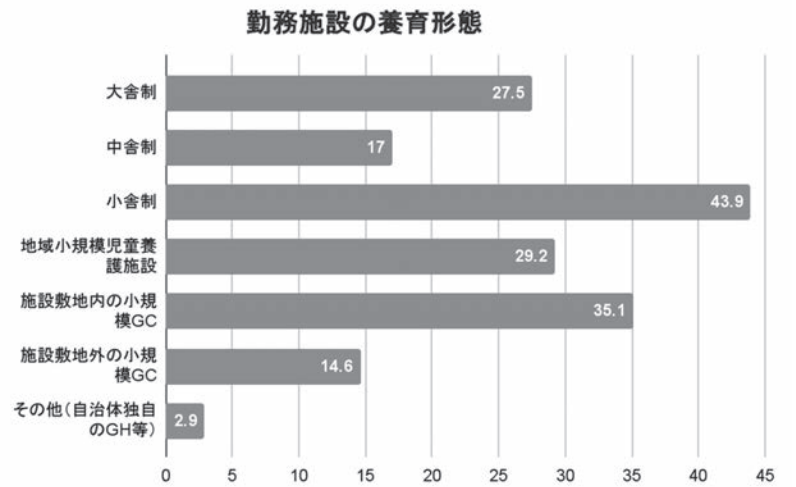

図２　回答者の勤務施設の養育形態（MA）

３）回答者の担当ユニット

回答者の担当ユニットについては、「小舎制」が最も多く47件（28.5％）であった。次いで「敷地内の小規模グループケア」32件（19.4％）、「大舎制」29（17.6％）であった。

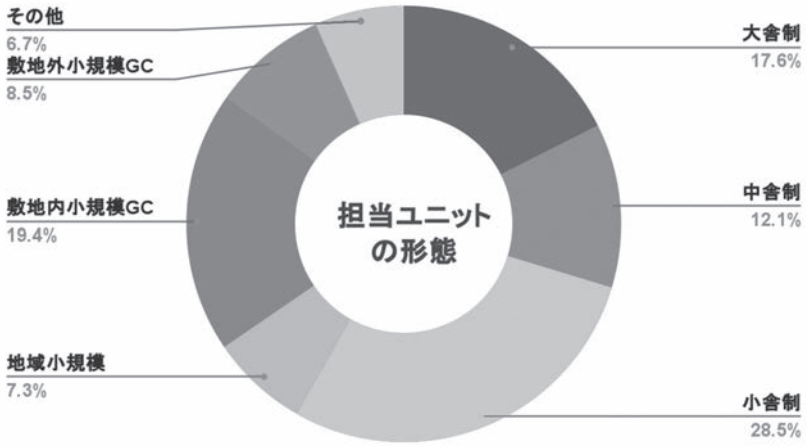

図３　担当ユニットの形態

回答者の担当している子どもの年齢については、「年齢は混合」が79件（47.9％）と最も多く約半数を占めた。次いで「主に小学生」が37件（22.4％）であった（図４）。

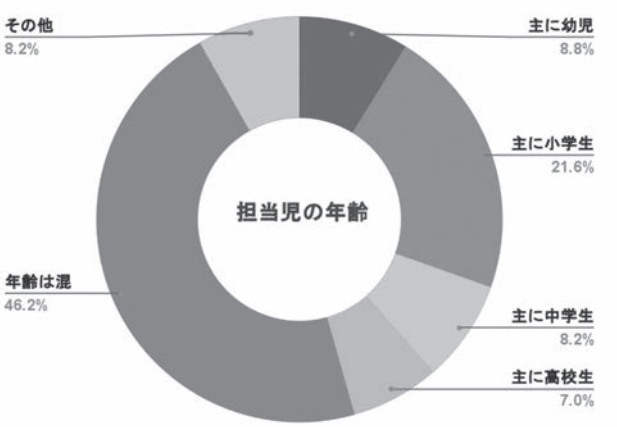

図４　担当児童の年齢

回答者が担当している子どもの性別については、「主に男子」が38.8%、「主に女子」が37.7%とほぼ同数で、「男女混合」が24.0%であった（図５）。

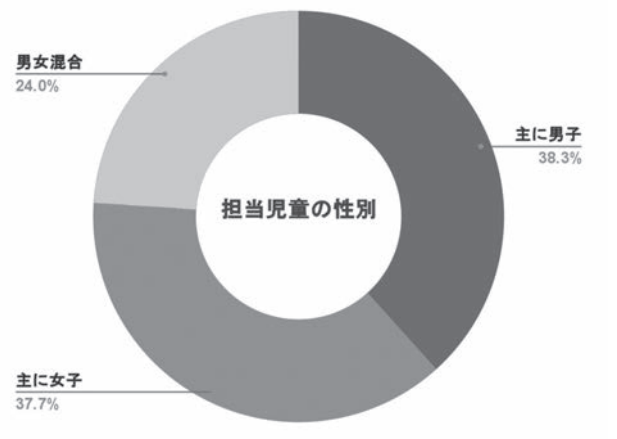

図５　担当児童の性別

４）回答者の年齢と勤務年数

回答者の年齢については、20代が75件と最も多く、全体の43.9%であった。次いで30代が45件（26.3%）、40代が35件（20.5%）であった（図６）。

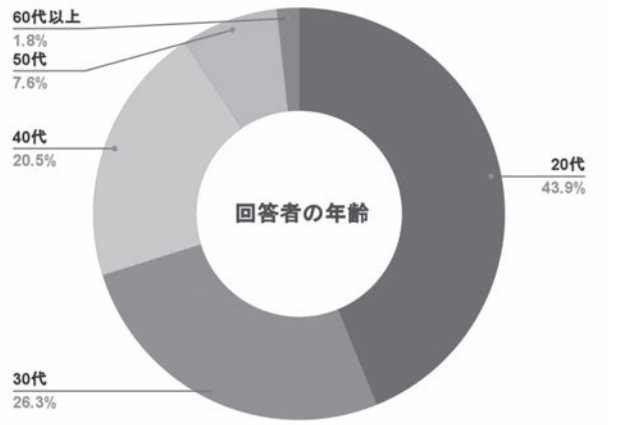

図６　回答者の年齢

回答者の現在の施設での勤務年数は、「５年以上10年未満」と「10年以上20年未満」が同数で50件（29.2％）あった（図７）。

現在の施設を含む社会的養護現場での経験年数については、「10年以上20年未満」が53件（31.0％）と最も多く、次いで「５年以上10年未満」46件（26.9％）であった（図７）。

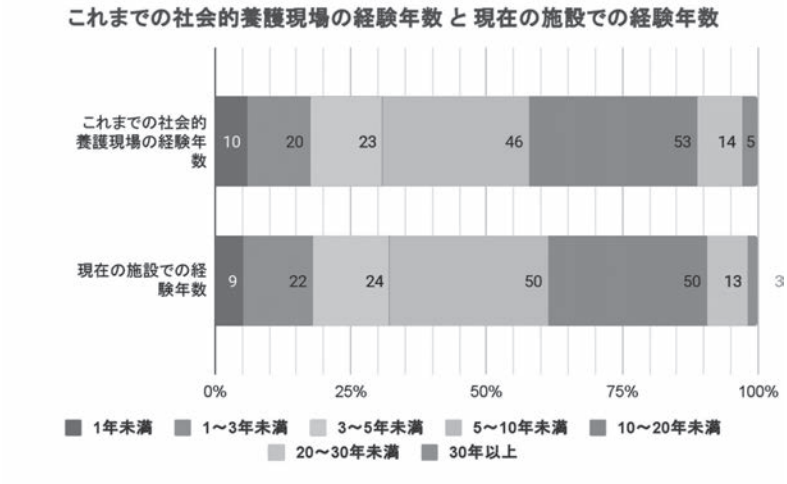

図７　回答者の勤務年数

回答者の今の施設での立場・役職については、「保育士・児童指導員」が88件（51.5％）と最も多かった。次いで「ユニットリーダー」が41件（24.0％）、「主任」が26件（15.2％）であった（図８）。

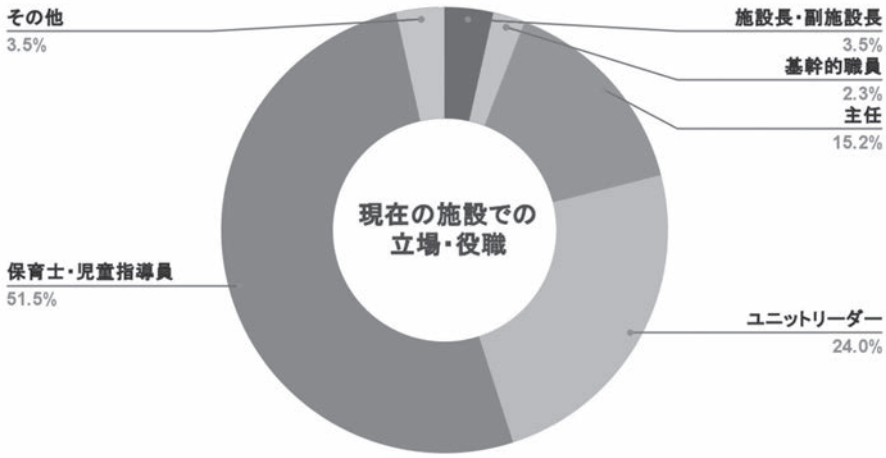

図８　回答者の現在の施設での立場・役職

５）子どもとのコミュニケーションやアドボカシー

次に、日ごろの子どもとのコミュニケーションやアドボカシーに関する回答者の意識や考えについて尋ねた。

「子どもは職員であるあなたに自分の気持ちや意見をよく言えていると思うか」については、「まあそう思う」が138件で全体の81.2％を占めた。あわせて「なぜ、そう思うか」についての理由を自由記述で尋ねたところ、「よくきけていると思う」の理由としては、「子どもから話をしてくるから」「個人的な話ができるから」といった「信頼関係が築けている」とする回答が23件で最も多く、「不満や要望を言ってくれるから」「SOSの表出があるか

ら」といった「子どもの要求表出」に関する回答が７件あった。また「ユニットのリーダーであるから」といった「職員の立場」が７件、「寝る前等話す時間を設けているから」「意図的に時間を設けてよく聞くようにしているから」といった「環境づくり」に関する回答が６件、「月に１度子ども中心に会議を行っているから」「苦情解決カードで聞き取りをしているから」といった「施設の取り組み」が５件、「長年一緒にいるから」といった「時間の長さ」に関する回答が５件あった。

また、少数ではあったが「あまり聞けていないと思う」の理由としては「まだ施設に来て間もないため」「忙しい姿を見せて『今は言わないでおこう』と子ども達に気を遣わせてしまう」「役割として、子どもに対して決定したことを伝えたり指導をすることも多く、子どもからは距離がある」といった記述がみられた。

さらに、子どもから聞く子どもの気持ちや意見の内容についても自由記述で尋ねたところ、最も多かったのは、「施設のこと」と「学校のこと」でともに54件、次いで「生活のこと」52件、「家族のこと」34件、「自分のこと」33件であった。

「施設のこと」のうち「施設のルールのこと」は24件（44.4％）であり、「ルール以外のこと」が30件（55.6％）であった。

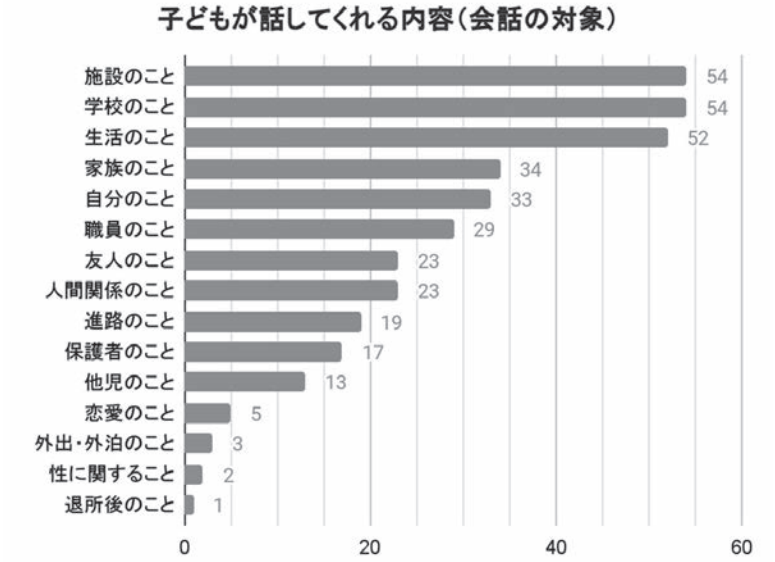

図９　子どもが話してくれる内容の自由記述の分類結果

会話の内容とはまた違う「会話の目的」という視点で分類すると、要求や要望など「自己主張」が107件（48.0％）と最も多く、次いで「報告」が62件（27.8％）「気持ちの吐露」が54件（24.2％）となった。

各項目を詳しく見ると、「自己主張」には、「要求」が49件、「不満」が48件と多数を占め、比較的ネガティブな感情の緩和を目的とした自己主張が多いことが分かった。また、「報告」については、上位から「出来事」が20件、「トラブル」が12件、「趣味嗜好」が12件「他愛もないこと」と、「自己主張」に比べ、比較的ニュートラルな内容の報告が多い結果となった。一方「気持ちの吐露」では、前述の２つに比べて圧倒的に多い回答があるわけではなく、「困り」・「悩み」がそれぞれ８件、「思い・気持ち」が７件、「楽しいこと」が４件、「過去のこと」・「相談」・「不安」・「がんばったこと」がそれぞれ３件など、非常にさまざまな感情が含まれており、子どもがそれぞれに持っている、感じている感情を開示していることが分かったが、全体の約１/４と、自分の細かな感情を伝える場面はあまり多くないのではないかと推察される。

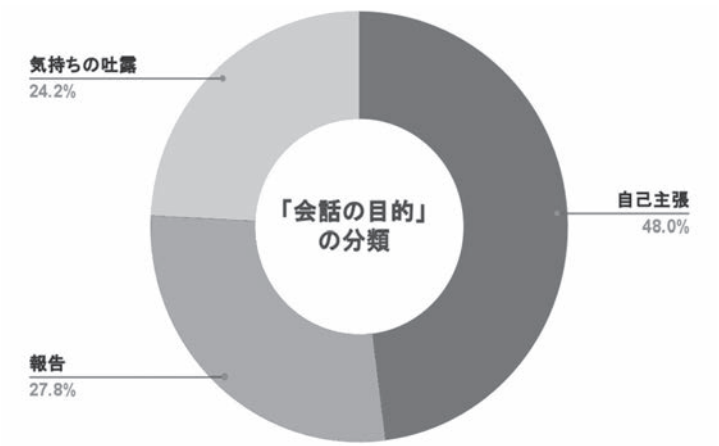

図10　子どもが話してくれる「会話の目的」の自由記述の分類結果

次に「子どもの意見をきくことはあなたにとって難しいことか」について尋ねたところ、「あまりそう思わない」が78件（46.4%）と最も多く、次いで「まあそう思う」56件（33.3%）であった。

「子どもが意見を言いやすいように職員として自分は工夫していると思うか」について尋ねたところ、「まあそう思う」が最も多く136件（79.5%）であった。あわせて、具体的にどのような工夫をされているか尋ねたところ、「個別に話せる場の設定」が38件（14.3%）と最も多く、次いで「日常会話の充実」29件（10.9%）、「雰囲気づくり」20件で（7.54%）あった。さらに、行動について、その意図や内容にそって分類を試みたところ、子ども自身が話してくれることに対する「聴く方法の工夫」が62件（22.9%）、子どもが話しやすい環境や状況などの「聴く空間の工夫」が57件（21.1%）と、多くの職員が子ども自身が話しやすいように大人側の耳を傾けて聴くための方法や空間に関する配慮を行っていることが分かった。一方、子どもが言いたいけど言えない言葉を探ったり、子どもの伝えようとしていることを掘りさげていくような「訊き方（問いかけ）の工夫」は19件（7.03%）、また子どもの意見が大人に聞き入れられ、それが何かしらの効果となって実感できるような「効いていく工夫」は11件（4.07%）と、子ども自身の声に対して子ども自身に自問を促したり、子どもの自己効力感を高めることにつながるような大人側の働きかけはそれほど多くはないことが分かった。

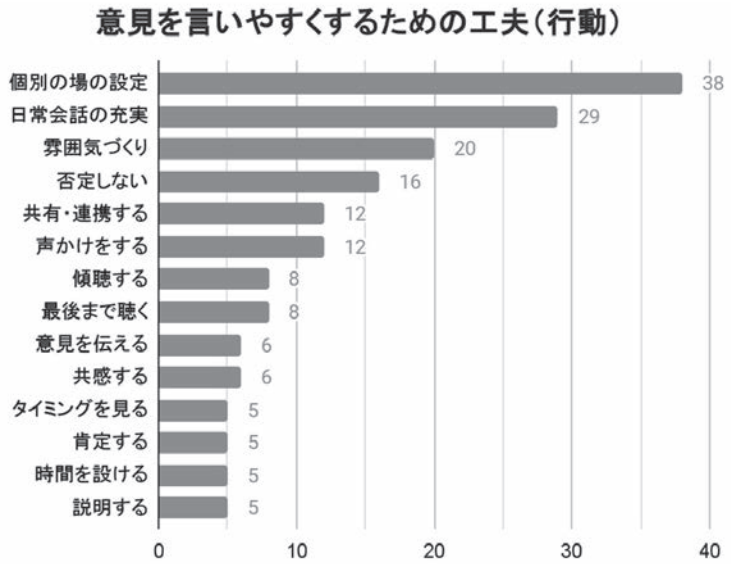

図11　子どもが意見を言いやすくするための職員の工夫（自由記述）

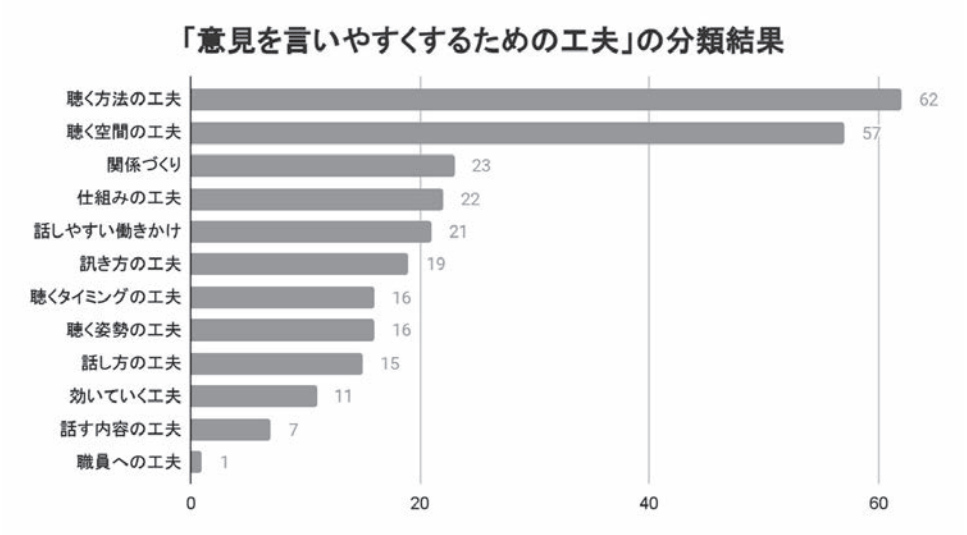

図12　「意見を言いやすくするための工夫」の分類結果（自由記述）

施設にいて「子どもに『自分の意見をきちんと言いなさい』と言うよりも『おとなの言うことをきちんとききなさい』という場面の方が多いと思うか」について尋ねたところ、「あまりそう思わない」が最も多く76件（44.4%）であり、次いで「まあそう思う」57件（33.3%）であった。

子どもの「意見」と「わがまま」を区別するのは難しいと思うかについて尋ねたところ、「まあそう思う」70件（40.9%）と「あまりそう思わない」69件（40.4%）とほぼ同数であった。

養育者として日頃から子どもの意見や気持ちを十分にきけていると思うかについて尋ねたところ、「まあそう思う」が109件（64.5%）であった。

養育者として、子どもの意見を今よりもっと聴こうとすることは大切だと思うかについて尋ねたところ「とてもそう思う」127件（74.7%）、「まあそう思う」43件（25.3%）であり、「あまりそう思わない」「全く思わない」と回答した者はいなかった。

子どもに大人の意見や方針などを押し付けてしまっているのではないかと思うことがあるかについて尋ねたところ、「まあそう思う」が108件（63.9%）と最も多く、「あまりそう思わない」が42件（24.9%）であった。

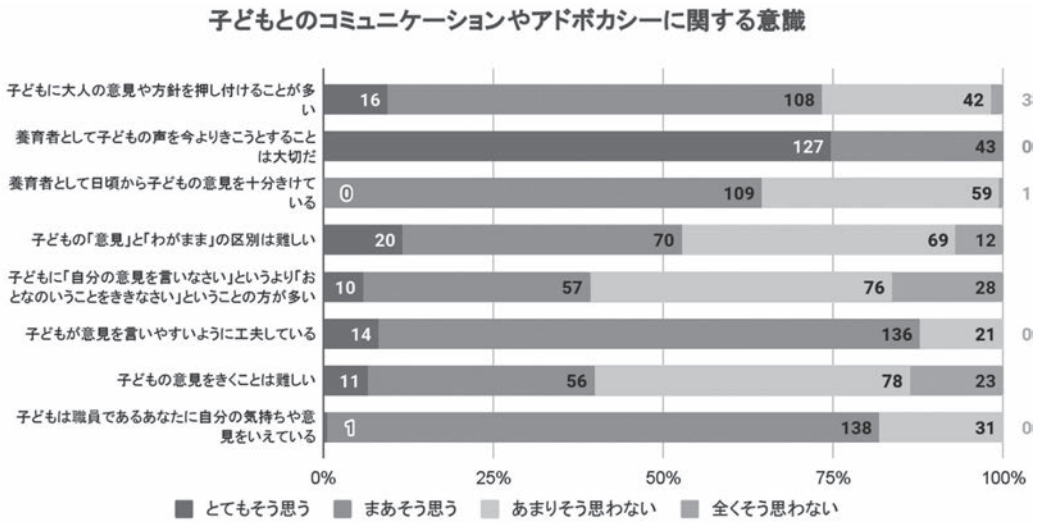

図13　子どもとのコミュニケーションやアドボカシーに関する意識

６）子どもの意見を聴くなかで、特に難しさを感じる内容や場面

子どもの意見を聴くなかで、特に難しさを感じる内容や場面として、どのようなものがあるか尋ねたところ、「生活のルールへの不満や要望等（門限、持ち物等）」が94件（55.0％）と最も多く、次いで「子ども自身の将来や進路の希望や不安」88件（51.5％）であった（図14）。その他の具体例としては、コロナウィルス感染対策に関する内容や、ほかの施設入所児童との比較の問題などが挙げられていた。

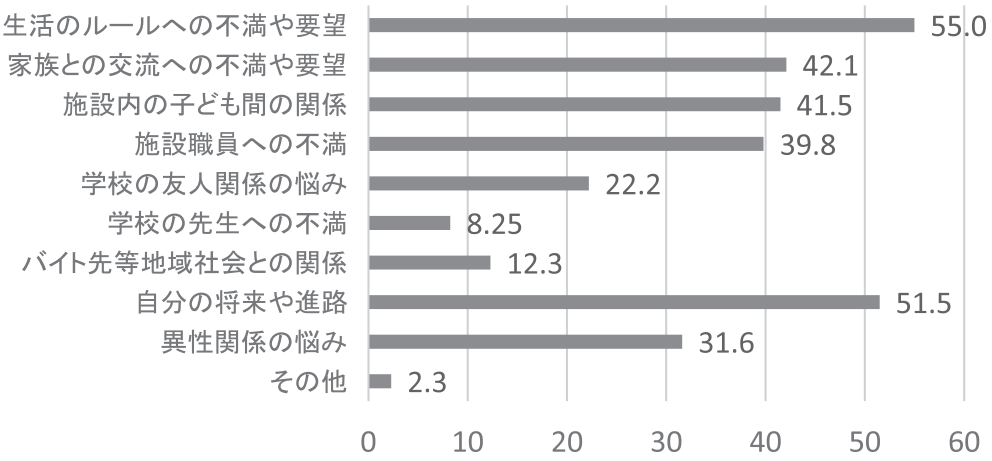

図14　子どもの意見を聴くなかで、特に難しさを感じる内容や場面（複数回答）

７）子どもの声を聴くことへの意識に影響する因子

子どもの声を聴くことへの意識に影響する因子について明らかにするために、スピアマンの順位相関係数を用いて相関分析を行った（表１）。

表１　子どもの声を聴くことへの意識に影響する因子との関連性

	担当児の年齢	回答者の年齢	現施設の勤務年数	全施設の勤務年数	現在の立場役職
子どもは職員であるあなたに自分の気持ちや意見をよく言えていると思うか	.070	.045	.054	.058	−.027
子どもの意見をきくことはあなたにとって難しいことか	−.184*	−.046	.018	.007	−.073
子どもが意見を言いやすいように職員として工夫しているか	−.005	.029	.114	.082	−.056
子どもに自分の意見を言うよりも「いうことをききなさい」という方が多い	.155*	−.120	−.116	−.156*	−.028
子どもの「意見」と「わがまま」の区別は難しい	.179*	−.308**	−.251**	−.282**	−.327**
日頃から子どもの意見や気持ちを十分にきけていると思う	.103	−.101	−.131	−.128	−.053
養育者として子どもの意見を今よりもっときこうとすることは大切だ	−.027	−.204**	−.194*	−.192*	.021
子どもに大人の意見や方針を押し付けてしまっていると思うことがある	−.013	−.095	−.095	−.112	−.080

*p<. 05,　**p<. 01

その結果、回答者の年齢が若いほど、子どもの意見とわがままの区別は難しいと感じていると同時に「今よりもっと子どもの意見をきこうとすることは大切だ」と感じていることが明らかになった。また、現施設での勤務年数やこれまでの社会的養護における現場経験年数が短い人ほど、子どもの意見とわがままの区別は難しいと感じており、また「今よりもっと子どもの意見をきこうとすることは大切だ」と感じていることが明らかになった。さらに、現在の施設での立場・役職が低い（施設長や主任等ではない）人ほど、子どもの意見とわがままの区別は難しいと感じていることが示された。

また、「相関がある」とまでは言えないものの、担当児童の年齢が低いほど「子どもの声をきくことは難しい」と感じる職員が多く、担当児童の年齢が高いほど、子どもに「自分の意見を言いなさい」というよりも「おとなの言うことをきちんとききなさい」ということが多く、「子どもの意見とわがままの区別が難しい」と感じる人が多い傾向にあることが推察できる。

なお、子どもの年齢、子どもの性別、ユニット形態などによる有意差はみられなかったことから、これらの条件にかかわらず、子どもの声を聴くことの難しさを特に勤務年数の短い職員や若い職員は感じていることが明らかになった。

表２　子どもの声を聴くことへの意識に関する回答内容の関連性

	問 10	問 11	問 12	問 13	問 14	問 16	問 17	問 18
問 10. 子どもは職員であるあなたに自分の気持ちや意見をよく言えている	1.000	−.036	.148	−.089	−.011	.337 **	−.009	−.107
問 11. 子どもの意見をきくことはあなたにとって難しい	−.036	1.000	−.059	.120	.237 **	−.203 **	−.036	.104
問 12. 子どもが意見を言いやすいように職員として工夫している	.148	−.059	1.000	−.102	−.082	.113	.097	−.004
問 13. 子どもに自分の意見を言うよりも「いうことをききなさい」という方が多い	−.089	.120	−.102	1.000	277 **	−.152*	−.073	.321 **
問 14. 子どもの「意見」と「わがまま」の区別は難しい	−.011	.237 **	−.082	.277 **	1.000	−.014	−.083	.220 **
問 16. 日頃から子どもの意見や気持ちを十分にきけていると思う	.337 **	−.203 **	.113	−.152 *	−.014	1.000	.112	−.077
問 17. 養育者として子どもの意見を今よりもっときこうとすることは大切だ	−.009	−.036	.097	−.073	−.083	.112	1.000	.045
問 18. 子どもに大人の意見や方針を押し付けてしまっていると思うことがある	−.107	.104	−.004	.321 **	.220 **	−.077	.045	1.000

*p<. 05,　**p<. 01

次に、子どもの声を聴くことへの職員に意識に関する回答内容の関連性について検証した（表２）。

その結果、「子どもは自分に意見や気持ちをよく言えている」と感じている職員ほど「日頃から子どもの意見や気持ちを十分に聴けている」と感じていることが示された。また、「子どもの意見を聴くことは難しい」と感じている人ほど「子どもの意見とわがままの区別は難しい」と感じ「日頃から子どもの意見や気持ちを十分に聴けていない」と感じていることがわかった。

また「子どもに『自分の意見をきちんと言いなさい』というよりも『大人のいうことをきちんとききなさい』と言う方が多い」と感じている人ほど、「子どもの意見とわがままの区別は難しい」と感じており「子どもに大人の意見や方針を押し付けてしまっている」と感じていることが示された。

さらに、「子どもの意見とわがままの区別は難しい」と感じている人ほど、「子どもの意見をきくことは難しい」「子どもに大人の意見や方針を押し付けてしまっている」「子どもに『自分の意見をきちんと言いなさい』というよりも『大人のいうことをきちんとききなさい』と言う方が多い」と考えていることがわかった。

８）特に難しいと感じる子どもの意見の内容と子どもの声を聴くことへの意識との相関

次に、特に難しさを感じる子どもの意見の内容と、子どもの声を聴くことへの回答者の意識との関連性について検証した（表３）。

表３　子どもの意見を聴くことへの意識と難しさを感じる子どもの意見との関連性

	生活のルールや不満	家族との交流	施設内子ども間の関係	施設職員への不満	学校の友人関係	学校の先生への不満	バイト先等の問題	将来や進路	異性関係
子どもは職員であるあなたに自分の気持ちをよく言えていると思う	.009	−.135*	−.009	−.016	.020	−.026	−.034	.079	.037
子どもの意見を聴くことはあなたにとって難しい	−.068	.137*	−.095	−.170*	−.118	−.147*	−.090	.043	−.047
子どもが意見を言いやすいように職員として工夫している	−.076	−.103	.056	−.069	−.018	−.074	.004	.089	.048
子どもに「自分の意見を言いなさい」よりも「言うことをききなさい」と言う	.161*	.056	−.210*	−.072	−.168*	.009	−.126	−.131*	−.060
子どもの「意見」と「わがまま」の区別は難しい	.141*	.066	−.128*	−.044	−.004	−.118	.015	−.016	−.046
日頃から子どもの意見や気持ちを十分に聴けている	.017	−.217**	.108	.119	.027	.065	−.086	.100	.042
子どもの意見を今よりもっと聴こうとすることは大切だ	−.044	−.078	.118	.004	−.020	−.039	−.179**	.158*	.039
子どもに大人の意見や方針を押し付けている気がする	−.060	−.060	−.159*	−.132*	−.026	−.004	−.079	−.087	−.097

*p<. 05,　**p<. 01

その結果、「子どもの家族との交流のあり方への不満や要望」を聴くことへの難しさを感じている職員ほど「日頃から子どもの意見や気持ちを十分に聴けていない」と感じていることが示された。また、「施設の中での子ども同士のトラブルや人間関係」に関する意見を聴くことが難しいと感じている職員ほど「子どもには（おとなの意見をきちんと聴くよりも）自分の意見をきちんと言いなさいと言っている」と考えていることが明らかになった。

次に、特に難しいと感じる子どもの意見に関する回答内容の関連性について検証した（表４）。

表４　特に難しいと感じる子どもの意見に関する回答内容の関連性

	生活のルールへの不満や要望	家族との交流への不満や要望	施設内子ども間の関係	施設職員への不満やトラブル	学校の友人関係やトラブル	学校の先生への不満やトラブル	バイト先や地域社会との関係等	将来や進路の希望や不安	異性関係の悩みやトラブル
生活のルールへの不満や要望	1.000	.004	.095	.264**	−.064	.075	−.018	.075	.044
家族との交流への不満や要望	.004	1.000	−.127*	−.004	.016	.073	.081	−.022	−.040
施設内子ども間の関係	.095	−.127*	1.000	.210**	.167*	.119	.049	.163*	.233**
施設職員への不満やトラブル	.264**	−.004	.210**	1.000	.084	.182**	.072	.202**	.071
学校の友人関係やトラブル	−.064	.016	.167*	.084	1.000	.137*	.235**	.188**	.191*
学校の先生への不満やトラブル	.075	.073	.119	.182**	.137*	1.000	.261**	.059	.055
バイト先や地域社会との関係等	−.018	.081	.049	.072	.235**	.261**	1.000	.121	.166*
将来や進路の希望や不安	.075	−.022	.163*	.202**	.188*	.059	.121	1.000	.251**
異性関係の悩みやトラブル	.044	−.040	.233**	.071	.191**	.055	.166*	.251**	1.000

*p<. 05,　**p<. 01

その結果、「施設での生活のルールへの不満や要望を聴くことの難しさ」を感じている職員ほど、「施設職員への不満やトラブル」について聴くことの難しさを感じていることが明らかになった。また、「施設の中での子ども同士のトラブルや人間関係」に関する意見を聴くのが難しいと感じている職員ほど「施設職員への不満やトラブル」について聴くことの難しさや「異性関係の悩みやトラブル」について聴くことの難しさを感じていた。

「施設職員への不満やトラブル」について聴くことの難しさを感じている職員ほど、「生活のルールへの不満や要望」のほか「施設内の子ども同士の関係」や「将来や進路の希望への不安や要望」を聴くことが難しいと感じていた。また、「学校の友人関係のトラブル」を聴くのが難しいと感じている職員ほど「バイト先等地域社会との関係」や「異性関係の悩みやトラブル」について聴くことが難しいと感じていた。さらに、「学校の先生への不満やトラブル」を聴くのが難しいと感じている人ほど「バイト先や地域社会との関係」について聴くことが難しいと感じていた。

また、「将来や進路の希望や不安」について聴くのが難しいと感じている人ほど「施設職員への不満やトラブル」「異性関係の悩みやトラブル」について聴くことは難しいと感じていることが示された。

9）「子どもアドボケイト」の導入に向けた動きについてどう思うか

最後に、「子どもアドボケイト」の取り組みについてどう思うかについて自由記述で尋ねたところ、この取り組みに対して期待や肯定的評価をするという趣旨の回答が46件と最も多かった。中でも、「自己選択力の向上や被害感の軽減につながる可能性が高い」「親の意向と勢いのみで引き取りが進むこともあるので、意見を言えたら子どもも気が楽になるのではないか」「子ども達が意見の反映を感じることができる動きなのでよいと思う」「意見を大切にすることは自己肯定感につながる」「子どもが大人を信用する手掛かりになる」「意見が反映できたら生活がしやすくなる」「個人を見ようとする意識が高まり、子どものやる気も上がる」「意見が出にくい児童が意見表現をする場ができることを期待したい」「子どもの意見の反映は家庭的な関わりに近付くと感じる」「子どもの気持ちの尊重につながる」といった「子どもが意見を言いやすくなることのメリット」を評価する回答が多かった。

また、「子どもの純粋な目線や意見を大人は忘れがちだが大切」といった「子ども目線の意見の重要性」を指摘する回答や、「まず意見を出すところからが支援のスタート」「子どもに寄り添った支援が可能になる」「聞く意識が高まる」といった「聞くことが支援につながる」という意見、「年齢が低く、うまく伝えられない子どもにとって代弁者がいることが安心につながる」「第三者の目線で見ていただけることで子どもたちも何か感じるところがあれば」のように、「第三者による介入への期待」を示す回答もあった。

次に、「子どもアドボケイト」の取り組みに対する期待と、不明点や心配が入り混じった「実現可能性への不安」を述べる趣旨の回答が30件と多かった。内容としては、「いいと思うが意見を言えても実現できないとき、言っても仕方ないとならないか」「行き過ぎた主張が出たときに精査が必要」「子どもの意見は大切だがどこまで取り入れるのか」「意見を実現できないときの折り合いをどうつけるのか」といった「意見の表明とその具現化のギャップ」を指摘する回答や、「子どもの意見に重きを置くのはよいが職員にとって対応が難しいと感じることが多い」「いいことだと思うが施設の体制や人員は反映しづらい状況」「見ている子どもの数が多いので理想は分かるが現実的にどう実現するか考えて欲しい」「言ったもの勝ちの状態になれば職員が今以上に働きづらくなる」「子どもとの対話の機会がアドボケイトが入ってくることで減っていしまい、やりがいが減ってしまうのでは」といった「意見の表明と施設の現実とのギャップ」を指摘する回答が出た。

また、「子どもアドボケイト」の取り組みに対する課題を指摘する回答が19件、取り組みに対して提案する回答が17件あった。

課題を指摘する回答では、「わがままも受け入れると社会でうまく生きていけるか不安」「子どもの折り合いをつける力や我慢する力が身につくか不安」といった「社会生活での不安」を挙げる意見や、「子どもと職員の意見が対立したとき等、制度の詳細が気になる」「制度の具体的なビジョンを示してほしい」といった「制度の具体像が不明」とする記述があった。さらに、「必要なときに子どもの近くにいてあげられない等、中途半端になると、また大人に裏切られたと思う子ができるのでは」「施設により事情が異なるので丁寧な仕組みを作って導入して欲しい」といった「中途半端な取り組みになることへの警戒」感や、「第三者が子どもの本当の思いに介入するのは難しいのではと思う」「子どもの言葉の真意の見極めはとても難しいと思う」「第三者委員の立ち位置はどうなるのか」「アドボケイトを担う人と子どもの関係性が難しい」といった「代弁者のスキルや関係性」に課題があるとする意見が出た。

提案する回答としては、「入口から出口まで代弁者がずっと変わらないのがよい」「意見を聞くことはいいことだと思うがSOS時以外で、日常的に聞ける第三者であればなおよい」といった「代弁者のあり方」に対する意見や、「大切だが意見が通らないときの受け入れる力も必要」「良い動きだと思うので意見を持つことと言うことの大切さと責任を教えるのが大事」といった「子どもへの教育的意義」を指摘する意見もあった。さらに、「言える子と言えない子に合わせた対応が必要」「成育歴や特性を踏まえて意見を聞く工夫が必要」といった「個に応じた聞く工夫」を求める意見や、「子どもの意見は大切だが子どもの意見と大人の意見を交換し、議論の上で反映させるのがよい」「聞く場面だけでなく答えを伝える場面もつくる工夫を」といった「大人の意見との調整」を求める回答などがあった。

６．考察

１）子どもから「自己主張（要求、不満）」を話された時の職員の対応の検討の必要性

子どもが話してくれる内容として、最も多かったのは「自己主張（要求49件、不満48件）」であった。このことから、施設で生活する子どもたちが日ごろから、様々な葛藤を抱えていることがわかると同時に、そうした不満や葛藤を職員に訴えている日常がうかがえた。今回の調査では、子どもから要求や不満が訴えられたときに、具体的にどのように対応しているのかまでは明らかにできていないが、クロス集計を通して、子どもの不満を多く聴いている職員ほど、「子どもの意見を聴くことは難しい」と感じていることが明らかになっている。

また「子どもの意見とわがままを区別することは難しいと思うか」についても、約半数の回答者が「難しいと思う」と回答しており、職員のニーズに答えるという意味においても「職員の聴くスキル向上」につながるような研修や養成が求められているといえよう。

さらに、アドボケイトの取り組みに関する意見のなかで「第三者が子どもの声を聴きにくることはいいことだが、そのことによって、施設職員と子どもとの会話の機会が減るのではないか」という不安の声もあった。

こうした結果から、やはり、第三者であるアドボケイト導入の取り組みを進めると同時に、日頃から一緒にいる施設職員に対して「子どもの意見をどう聞くか」「子どもから不満や要望が出た時に、どのように対処するか」といったテーマでのスキル研修等の必要性が示唆されたといえるのではないだろうか。

２）子どもが意見を言いやすくするための工夫についての課題

「子どもが意見を言いやすいように職員として自分は工夫していると思うか」という問いに対して、約８割の回答者が「まあそう思う」と答え、ほとんどの職員が、子どもの声を聴くことは大切だと考え、様々な工夫を行っていることが明らかになった。しかし、具体的にどのような工夫をしているかを尋ねると「個別の場の設定」や「日常会話の充実」「話しやすい雰囲気づくり」といった「話す機会を増やすこと」の工夫は試みて

はいるものの「最後まで聞く」「肯定する」「共感する」といった「いかに話を聴くか」といった「ききかた、きく姿勢」について言及した人は少なかった。子どもの立場にしたら、職員と話す頻度がどれだけ増えても、「ちゃんと聴いてくれない」と思える時間が増えるだけであったら、それ以上もっと話したい、聴いて欲しいとは思えないであろう。「聴く機会や時間を多くもつ」こともちろん大切であるが、「どう聴くか」「どう応えるか」に職員が関心や課題意識をもつこともまた重要ではないかと考える。

3）子どもの意見の内容から社会的養護の制度や実践の課題について考える

子どもの意見を聴くなかで、特に難しさを感じる内容や場面について、最も多かったのは「生活のルールへの不満や要望」であった。ここから、日頃の施設での生活を職員と子どもとで一緒に見直す必要性が示唆されているといえよう。職員が「生活のルールへの不満や要望を聴くことが難しい」と感じているということは、職員自身もまた、施設生活のあり方やルール等に疑問を感じているからかもしれない。生活の中の一つひとつの決まりごとが「果たして誰のための何のためのルールなのか」を見直し、「本当に変えられないものなのか」を吟味し、子どもたちも職員も心地よく生活できるルールや生活のあり方に変えていけるような関係性や施設全体の姿勢が求められている。具体的には、各ユニット等の生活単位での自由度や柔軟性をあげることによって、そこで暮らす子どもたちの不満は解消され、職員が子どもの不満や要望に苦しむだけで終わることが減り、子どもと一緒に解決を目指すことができるようになるのではないか。

また、２番目に多かったのは「子どもの将来や進路に関すること」であった。子どもの進学や就職、また家族との再統合や関係のもちかた、どこに住むかどう生活するか等といった、一人ひとりの子どもの不安に寄り添い、支援できる職員が求められている。施設職員だけでは、子どもの退所後の生活まで見通しをもつことが十分できなかったり、きめ細やかなリービングケアまで手が回らなかったりする現状が今の施設にはあるかもしれないが、まずは、子どもが「本当はどうしたいのか」を職員にしっかり伝えられる関係性を構築したうえで、その子どもの願いや夢を実現するために必要な情報収集と情報提供、複数の選択肢を示しつつ、一緒に悩み考える養育者としての姿勢が施設職員には求められる。またそれが可能となるような人的配置も重要である。さらに、自立支援に必要な外部との連携についてもそれぞれの施設で検討すべき課題だと考える。

7．本研究の限界と今後の課題

本調査研究では、日々子どもと向き合っている施設職員が、子どもの気持ちや意見をきくことに対して、どのように感じているのか、またどのような難しさを感じているのかを把握することを目的とした。そのため今回の調査では「職員がどう感じているか」の回答を求めるにとどまっており、実際にたとえば、週に何時間くらい子どもの意見をきくような時間をもっているか、等具体的な実践や取り組みについては十分に把握することができなかった。「子どもの声を聴くようにしている」と考えることと、「実際に子どもの声を多く聴くことができている」という実態との間には齟齬があることも考えられる。今後は、各施設で具体的に子どもたちの気持ちや意見をきくための工夫がなされているのかについても検証していきたい。

さらに、今回は「子どもの声を聴く立場」にある施設職員を対象にアンケートを実施したが、職員の立場からの回答と、子どもの立場からの回答は当然異なってくるものと予想できる。今後、施設で生活している子どもたちが、自分の気持ちや意見を職員にきいてもらっていると思っているか否か、また、どんな気持ちや意見をきいてほしいと思っているのか等についても調査研究を重ね、養育者である施設職員に子どもが気持ちや意見を言いやすい関係づくりのために必要な取り組みや実践のあり方について、施設現場と一緒に考え、つくりあげていけるような研究を進めたいと考えている。

謝辞：本調査にご協力いただきました、近畿２府４県にある児童養護施設のみなさまに心より感謝申し上げます。お忙しい中、ありがとうございました。

文献

新たな社会的養育の在り方に関する検討会（2017）「新しい社会的養育ビジョン」https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000173888.pdf

栄留里美（2015）『社会的養護児童のアドボカシー：意見表明権の保障を目指して』明石書店

伊藤嘉余子・井上翔一・藤井健志（2020）「デザイン国語とは」https://www.designkokugo.com/

三菱UFJリサーチ＆コンサルティング（2019）「子どもの権利擁護に新たに取り組む自治体にとって 参考となるガイドラインに関する調査研究 報告書」（平成30年度子ども・子育て支援推進調査研究事業）https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000579038.pdf

NHKハートネットTV（2019）「【特集】子どものSOSの“声”(4)「アドボケイト（代弁者）」という考え方」https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/217/

社会保障審議会児童部会（2016）「新たな子ども家庭福祉のあり方に関する専門委員会報告（提言）」https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000116162.html

Current situation and challenges of ‘listening to children’s views and voices’ for care workers in Children’s home: Consideration from a questionnaire survey of care workers in Children’s home

Kayoko Ito[1], Takeshi Fujii[2], Shoichi Inoue[3]

1）Osaka Prefecture University
2）Osaka Prefectural Fujiidera School for Students with Needs
3）Kyoto Municipal Kyoto Sowa High School

Abstract

The aim of this study was to clarify what kind of awareness and difficulty the care workers of Children’s homes have in listening to children’s views and voices, and what kind of training and support the care workers need in the future. As a result, it became clear that while many care workers answered that they “make an effort to listen to children’s views” and “think it is important to listen to children’s views and voices”, they also thought that “it is difficult to distinguish between children’s opinions and selfishness” and “it is difficult to listen to children’s views”. In addition, although many of the care workers are making efforts to increase the opportunities to listen to children’s views, they are not able to practice “listening skills” such as “listening to the end of the story” and “listening with acceptance and empathy”. Furthermore, as most of the opinions from the children were dissatisfaction and requests, the results of the survey suggested the need for adults and children to reconsider the way of life in the Children’s home together.

Key Words: Children’s home, self-advocacy, children’s right to express their views, children’s views